

日本におけるキェルケゴール『愛の業』の受容史

とその理解

森田 美芽

序 問題点 『愛の業』のキリスト教とは何か

キェルケゴール中期の代表作『愛の業』(*Kjerlighedens Gjerninger*, 1847)は、キェルケゴールの著作の中で、極めて重要な存在であるにもかかわらず、我が国のキェルケゴール研究の中で、あまり取り上げられてこなかった。その理由として、『不安の概念』や『死に至る病』のような、キリスト教に直接馴染みのない人にとっても首肯し得る、普遍的な人間の実存への洞察や、『これか—あれか』や『人生行路の諸段階』に見られる、美的な生き方と倫理的生き方の対比における人間描写の妙といった要素が少ないことである。彼が本名で、しかも直接的にキリスト教の本質的な愛について語る作品であることが、「単独者」や「実存弁証法」といった彼の一般的に解釈されたイメージと異なるといったことが理由として挙げられよう。言ってみれば、あまりに直接的にキリスト教の愛の教えを語るという内容、説教としての文体などから、一般的なキェルケゴール読者にとっては、あまり関心の持ちにくい本と言ってよい。

しかし、キェルケゴールの思想全体を考える時、『愛の業』の意義は決して小さくはない。キェルケゴールの意図した、「キリスト教世界にキリスト教を再導入する」という試みは、単純に『キリスト教の修練』に描かれたような、峻厳のキリスト教、この世における殉教を求める厳しい要求をなすキリスト教だけではなく、その一方で、「恩寵」に代表されるキリスト教の愛と赦しを基調とする、「認容のキリスト教」があることが注目されてきた。キェルケゴール自身はその両者を描いているが、キリスト者にとっての、この2つのキリスト教の弁証法的な生を生きることの課題という構造は、あまり評価されているとは言えない。それを理解する上で、この『愛の業』は、キェルケゴールの描くキリスト者としての生き方、そこに見られる神との真実な関係を示しているという点で、いわば『死に至る病』の病の癒しに当たる人間の実存の変化を描くことによって、そうした仮名著作と表裏の関係にあると言えよう。

それゆえ本稿では、キェルケゴールの『愛の業』の日本における受容史を顧みつつ、『愛の業』における愛の宗教性の意味を考察する。

なお、キェルケゴールと彼の著作に関わる表記について、我が国では「キェルケゴール」と「キルケゴール」の二種類が使われている。これは、戦前からの京都と東京におけるキェルケゴール研究者のグループの見解の差異によるものであり、筆者は前者を採用し、「キルケゴール」の表記は引用のみとする。また『愛の業』の訳も『愛のわざ』とされる場合があるが、本稿では『愛

の業』で統一する。

1. 我が国における『愛の業』受容史

我が国のキェルケゴール研究史を紐解くと、キェルケゴールの受容は明治期に始まり、和辻哲郎による『セレン・キェルケゴオル』が刊行されたのが大正5年（1916年）であり、世界的にも早い時期に本格的な研究が始まっている。

しかしキェルケゴール受容については、三木清に代表される、実存哲学の祖としての理解、または弁証法神学の基となった思想家、という傾向が強かった。これらは1930年代、ドイツにおいてキェルケゴールが知られるようになり、シュレンプによる翻訳により、ドイツの哲学や教会において広まったことの影響が大きいと言える。すなわち、前者としては、反ヘーゲル的な個人の重視、個人の実存における弁証法的な展開を経てより高い実存の境涯に至るという、教養主義的な傾向や、『死に至る病』や『不安の概念』などの人間心理の洞察や描写に重きを置く解釈が有力であった。そこでのキーワードは、実存弁証法、「あれかーこれか」、決断、選択、孤独、「例外者」などであり、社会の中で大衆となって自己を忘れた者に、本来の自己を見出すべき、という趣旨に理解されていた。一方、神学の世界では、バルト神学が一世を風靡し、「神と人間の絶対的な質的差異」が強調されたことが大きく影響し、特にそれを強調する『キリスト教の修練』が、「戦闘の教会」を強調して、既存の教会や社会の秩序への批判として受け止められた。（注1）

そうした二方面からの関心に、戦後の混乱期における実存主義への共感なども加わって、キェルケゴールは日本社会の中で、一部の研究者のみならず、広く社会に受け入れられた。そのため、何度かに亘り、全集あるいは著作集の刊行が行われている。しかしそれらの中で『愛の業』は、いわば、そうした一般の関心からも、また神学的な潮流からも離れた作品として、我が国ではあまり注目されていなかった作品の一つとなった。

戦前（1935年）に公刊された改造社版の『キェルケゴール著作集』全3巻には、『死に至る病』『不安の概念』さらに『キリスト教への修練』等が所収されているが、そこには『愛の業』は入っていない。

日本において最初の『愛の業』の翻訳は、第二次世界大戦後、人文書院から刊行された『キェルケゴール選集』第9巻（1948年）である。芳賀檀により『愛について』という題で、後に新潮社より1955年に文庫版で発行され、以降、1973年に26刷を数えている。底本はシュレンプ版による *Leben und Walten der Liebe* 『愛の生命と摂理』の初め5章で、それ以前に京都の人文書院から発行されているものの再版である。内容は「愛のかくれた生命について、又愛はその果の実によって知られること」「愛さ『ねばならぬ』」「汝は『隣人』を愛すべし」「汝は隣人を愛すべし」「愛は律法の完全なり」とされている。つまり、残り3編は省略されている。

この新潮文庫版の解説において芳賀は、「ここにいう『愛』とは、神の愛に対する人間の壮烈

な登攀であり、『愛の絶頂』に対する苦痛に充ちた遠征」であるとして、キリストによって具現化された犠牲愛の極致をみざる苦難に満ちた闘いであることを指摘し、また彼の要求する『愛』が、人間の不可能の限界に接している、と言う。人間にとって不可能なまでの努力を、過酷といつてよい真摯さが要求される、としている。すなわちこれは、キェルケゴールの愛の要求を、カント的な道徳的努力を求める者との解釈である。そして芳賀は、それが「不可能」であることを認め、一種の諦めを伴うことを示す。それゆえ、「社会」に対しても「妥協」に対しても寛大ではなく、「真理」ではなく「錯覚」にすぎないとする。そうした苛烈な要求のキリスト教は、犠牲の極致である。

これは、近代が宿命的に背負った言語に絶する不幸の中であって、清らかで美しくあるために苦しまねばならない多くの人々に捧げられた、としている。¹つまり、芳賀はこの愛の要求を、『キリスト教の修練』と同様に、人間に不可能な要求をし、それに対する努力の中に、慰めを見出す、というものである。またこれは、キェルケゴールの愛の要求の苛烈さが実存の変革に至る弁証法的作用を持つものであることも指摘されていない。これはテキストの欠陥でもある。

このテキストはシュレンプ版の『愛の生命と摂理』冒頭の5章のみであることが示されているが、それはあくまで『愛の業』第一部冒頭部分であり、第二部に展開される、そこからいかにして人が愛の業を行う者となるかというテーマは取り扱われていない。シュレンプ版は多くの編集を伴っており、キェルケゴールのテキストに対する解釈の含まれた意識が多く、当時のドイツにおけるキェルケゴール理解が反映されているが、芳賀もその例にもれず、ニーチェやリルケへの影響を取り上げている。それはやはり、当時のキェルケゴール理解が実存主義的な解釈に偏っていることが理解される。

その後、白水社版キェルケゴール著作集の第15、16巻に全編の訳が初めて収録され、武藤一雄と芦津丈夫が訳している。これも同じテキスト、シュレンプ訳の *Leben und Walten der Liebe* をもとに訳されている。この訳は1964年に刊行されているので、ヒルシュ訳の版が間に合わなかったことが、第16巻の後書で触れられている。

武藤は解説において、「この書は、単なるキリスト教講話であるばかりでなく、キェルケゴール自身が、『講話の形でなされた若干のキリスト教的考察』と名付けていることが注意される。ここでは、キリスト教的真理の考察のために不可避な、きわめて透徹的であるとともに、あらゆる悟性的考量を超絶する彼独自の弁証（ディアレクティク）が駆使されている。」²として、「そこには、一見、きわめてとらわれない実存的—宗教的に実存的—な思惟のきわまりなき自由な展開があるかに見えて、しかも、神学的見地からいっても、聖書に即して、きわめてゆるぎのない厳密さと真摯さにつらぬかれている。」³（同）と、この書の特徴を、「弁証法的」「宗教的・実存的」「厳密さと真摯さ」と捉えている。そしてこの書の思想的特色として、ここで強調される「隣人愛」がキリスト教倫理の根本をなすものであり、「キリスト教における信仰と倫理との関係は、

畢竟信仰と愛との関係に帰するといっても過言ではない。」⁴であり、ルター主義がキリスト教的な愛の義務の真摯さや、愛の律法的・当為的性格を希薄化したのではないかとの疑問を呈する。そしてそれゆえに、キェルケゴールはそれを必然的に強調したとする。それは後に、「模範としてのキリスト」の強調となる。⁵そしてアンダース・ニーグレンの『エロスとアガペ』と比較して、キェルケゴールの場合、「人間愛と神的愛との峻別と同時に、いたるところにそれらの具体的な生きた関係が見失われないで問題にされている」⁶ことを注目すべきとする。

従って武藤は、この書における真にキリスト教的な隣人愛と、単なる偏愛や自己愛の延長にすぎない愛が区別され、しかも、人はその隣人愛を自ら行うべく自己愛を放棄しなければならないこと、またそのことが同時に新の自己愛が成り立つことを指摘している。そしてこのことの意義を、キリスト教世界に対する厳しい批判として、後の「殉教のキリスト教」や教会攻撃へと結びつくものと見ている。また、彼の社会的な保守主義の背後に、「あらゆる社会的革命的立場を超えながら、それよりもっと根底的であり、しかも永遠に現在の意義を失わないキリスト教的愛の使信の真に革命的な意義が深く信ぜられていることが看過されてはならない。それは特に「神の前における平等」思想として、隣人愛の教えと結びついて、驚嘆すべき説得力をもって解明されている。」と見ている。⁷

確かに武藤の分析は、訳書の刊行当時の社会的関心の高さから、隣人愛が社会性のつながりで受け入れられていたことがうかがわれるが、それがキェルケゴールの思想の全体像への関わりはまだ明確には意識されていなかったと言える。

その後、梶田啓三郎を中心として、デンマーク語原典からの翻訳によるキェルケゴール全集が、筑摩書房より1962年から刊行されたが、『あれかーこれか』『死に至る病』『反復』『おそれとおののき』を中心とした4冊が公刊されたに止まった。また実存主義協会による『キェルケゴール講話・遺稿集』（理想社）も、1964年に第6巻が刊行され、『アドラーの書』『武装せる中立』等が取り上げられたが、これらの出版計画はいずれも頓挫している。そのため、ここに『愛の業』が所収される計画であったかどうかは今日では不明なままである。

そして、新地書房より、『キェルケゴールの遺稿・講話集』全9巻が1979年から1983年にかけて出版された。ここには、『アドラーの書』や『18の建徳的講話』など、これまで顧みられなかったキェルケゴールの宗教的著作を、未完の作品も含め取り上げるという画期的な全集であったが、この『愛の業』は入っていない。

そして、創言社による『キェルケゴール著作全集』が刊行されたのは、1988年である。この全集は、キェルケゴールが生前刊行したすべての著作をデンマーク語原典に基づいて翻訳する試みであって、2011年に最終巻が刊行された。その中で『愛の業』は1991年に第9巻として刊行された。これは我が国で唯一、信頼できる原典からの完訳ということになる。底本はデンマーク語第3版である。これは尾崎和彦・佐藤幸治によるもので、聖書の引用が文語訳を用いるなど、

やや文体が古い面はあるものの、尾崎和彦が中心となって詳細な注をほどこし、日本語としても理解しやすい、優れた翻訳であると言える。

以上見てきたように、『愛の業』の完全な翻訳自体が、実際には20世紀の末まで公刊されなかったことに象徴されるように、キェルケゴールの著作活動の全体像を日本語の文献で把握することはきわめて困難であった。それゆえ、キェルケゴールの宗教的著作を含めた著作活動の全体像の把握が進まなかったことは否めない。そしてその中で、『愛の業』は、名前こそ知られていても、その実像の掴みにくい著作であったことは事実である。従って、次に『愛の業』が宗教的著作のなかでどう位置付けられるか、どう理解されてきたかを、大谷愛人らの研究を通してみたい。

2. 『愛の業』の研究史

(1) 大谷愛人『キェルケゴールにおける著作活動の研究』における『愛の業』の位置づけについての考察

大谷愛人は、『キェルケゴールにおける著作活動の研究』において、『愛の業』を彼の著作活動の中にどう位置付けるかの問題を通して、『愛の業』の思想的な特徴とその意義を考察している。大谷の方法は、まずキェルケゴールの宗教的著作自体の中で、ルーディン、ヒルシュ、マランツクらによる、キェルケゴールの宗教的著作の構成を検討することによって、宗教的著作活動の構造を理解しようとするのであった。

まず、W・ルーディンの見解について。ルーディンは、まだ十分に資料の揃っていない1880年に『キェルケゴールの人と著作 一つの試み』によって、キェルケゴールの宗教著作の全体を真正面から取りあげ、分類した最初の人と言われている。ルーディンはキェルケゴールの執筆活動を、1843年から1846年までを第1期とし、『哲学的断片への結びとしての非学問的後書』を転機としている。この時期の宗教的著作は『18の建徳的講話』と『想定された機会における3つの講話』である。次いで1846年から1848年の『我が著作活動の視点』までを第2期とし、『愛の業』は『様々な精神における建徳的講話』および『キリスト教講話』とともにこの時期に分類される。第3期は、1849年から1851年で、ここは全く新しい時期と見なされ、アンチ・クリマクスの名を中心に第二の偽名著作の時期とし、『死に至る病』『キリスト教の修練』と共に「金曜日の聖餐式における3つの講話」などがこの時期に分類される。第4期は1851年～54年で『なんじ自ら裁け』までとし、1855年の『瞬間』は独立的に捉えている。⁸そしてこうした時期的な分類の節目とその視点など、後々までキェルケゴール研究者にも参考とされる基本的な図式となっている。

続いて、イマヌエル・ヒルシュの研究について。ヒルシュは1933年当時、歴史的方法を重視し、これらの時期の区分を、著作の刊行年月日のみならず、著作の準備時期を含めて行っている

という点で、こうした分類の根拠となる理論を徹底して研究している点が注目される。さらに内容の点からは、「キルケゴールのキリスト教的実存のための努力の家庭とその思想と信仰の発展過程とを著作との関係でみてゆこうとする視点」⁹に従っている。

この視点からすると、『愛の業』は、大きく 1846 年を境とする 2 つの時期の、後半の第 1 期に属することになる。この時期の特徴をヒルシュは、キリスト教的なものへの間を、「行為において、すなわち、いままでの彼の特別な個人的運命や使命を脱ぎすて、真にキリスト教的実存をしようとするその生の闘いにおいて応えようとした」とみなし、上述の他、『アドラーの書』や『人は真理のために打ち殺される権利をもつか』などの未完の作品を入れている。¹⁰つまり、ヒルシュはキルケゴールの著作活動を、それまでとは全く質の異なった時期として捉えている。ヒルシュはその区分を、キリスト教的実存の努力の過程とそのため思想と信仰の発展過程とを中印に行っている。そのことで、キルケゴールの著作全体の、個々の著作が二重性に組み合わせられていく弁証法的構造を明らかにしたと言える。

ただし大谷は、ヒルシュのこの功績を認めつつも、1848 年 4 月 19 日の「私の全本質の変化」が、彼のその後の信仰と著作の変化に決定的な変化をもたらした点を問題にしていない点を批判している。¹¹

さらに大谷は、1940 年の『S・キルケゴール』で知られる J・ホーレンベアが、『愛の業』を、建徳的講話と異なる「論争的著作」¹²に分類し、後期の宗教的著作の中でもこれだけを独立させて分類していることを取り上げる。『愛の業』は、偽名の美的著作との対応関係にある前期の宗教著作からも、それ以降の宗教著作からも区別されると言う。それは、ホーレンベアは講話の全体を①建徳的講話②キリスト教講話③敬虔なる講話と分類しているが、愛の業だけは独立させている。それは、それ以前の宗教著作と違って明らかに論争的な調子で書かれており、むしろ偽名著作に近いからとしているからだだが、大谷はこれを否定している。¹³それはルーディンの場合と同様、1848 年の転機の宗教的重大性を考慮に入れていないからである。

それとは逆に、大谷が評価し注目するのが、G・マランツクの分類である。マランツクは、『キルケゴールの弁証法と実存』（1968 年）などで知られている。彼は、偽名著作と建徳的著作が並行して弁証法的二重性のもとに書かれていること、それが人間の「実存」の構造から発していること、さらに、建徳的著作が自らの内部に弁証法的視点をもっており、これらが建徳的なものの構造を内部から規定している点を指摘する。¹⁴それは、4 つの視点にまとめることができる、という。

第一に、キルケゴールは、建徳的なものの線を描くに際して、総合の思想、段階の教義を用いていること、第二に、主体性を益々強化し、その結果主体性がキリスト教との出会いのもとで自らの極点に達すること、第三に、キルケゴールは、著作活動の前進運動のもとでその都度ごとに新しい立場を伴うことになる新しい洞察と敬虔とに基づいて、据えての実存的態度を変容さ

せる反復の法則を用いているということ、第四に、具体的な者のもっとも明白な形式が範例的なものとなるような、中小と具体の代る代るの使用であるということ。

こうした弁証法的視点のもとに、宗教的著作の構造を見る時、全体を大きく二つに分ける。すなわち、初期の『18の建徳的講話』から、『愛の業』、『キリスト教講話』等を含む前期と、アンチ・クリマックスの偽名による書と著作最終局面として『死に至る病』『キリスト教の修練』及びそれ以降の宗教的著作に分ける。ただし、『瞬間』は入っていない。¹⁵

それゆえ、マランツクの考えでは、初期の『18の建徳的講話』はあくまで宗教性の中でも「直接性」の段階であり、それが、『愛の業』などの時期には、「反省と『反復』の法則を通じて宗教性の内部における倫理的段階の頂点に達した」と大谷は理解している。そして「新しい直接性」に達した人間にキリスト教が要求する者は、これまでとまったく新しいものであり、それを明らかにしようとしたのが、『野の百合、空の鳥—三つの敬虔なる講話』であるとする。そこから、キリスト教の要求の先鋭化がまず『死に至る病』、『キリスト教の修練』に向かうのである。その転換の中に、「1948年4月19日」の大転換も位置付けられている。¹⁶

(2) 『愛の業』の内容についての大谷愛人の見解

こうしたキェルケゴールの宗教的著作の分類について、大谷は、1848年4月19日の日記に記された彼の転換、「私の本質が変化した」の記事の重要性即ちキェルケゴールの作家性と人間性の大きな転換及びそれに基づく彼の著作活動の変革、また彼の宗教的著作の弁証法的展開及び、仮名諸著作との弁証法的関係の全体から、マランツクの説を最も評価しつつ、独自の分類を行っている。こうした歴史的なキェルケゴールの著作活動の構造を踏まえて、大谷は自身の分類として、『愛の業』を含む宗教的著作を第二期の(2)のキリスト教的講話として、そこに「様々な精神における建徳的講話』『愛の業』『キリスト教講話』を位置づけ、その特徴として、転換点の書としての『後書』の刊行後、そしてコルサール事件の経験後であり、対応する「二重性」の相手は『哲学的断片の結びとしての非学問的後書』であるとし、その呼応関係も、直接的な緊張関係ではなく、「非常に鋭く深い『反省的關係』になっているとする。

その特徴は、聖書の教えやことばそのものというよりも、「それらに生きるキリスト者の生活の仕方そのものの方へと向かってゆき、それが聖書のことばや教えの真理に照らして深く鋭く『反省』されることを内容としている」¹⁷としている。それゆえ、これらは初期の作品群とは一段異なったものとなり、そこから、1848年4月19日の大転換を経て、これまでの二重性を終わらせ、全く新しい地平での新しい二重性の設定、つまり、「桁外れに高いキリスト教の理念性」を一方に控え持つ「倫理・宗教的次元」としてのアンチ・クリマックス名での『死に至る病』『キリスト教の修練』へとつながっていく。

これらを基に、大谷は『愛の業』の分析を行うが、ヤンセンの「本書においてキェルケゴールは、

思想においても言語においても確かに権能をもって、彼のキリスト教倫理学を書いている。この書物の全体が隣人との関係を扱っている」という主張、またマランツクの、『愛の業』においてキリスト者のための倫理的理想はその頂点に導かれている、という主張を受けて、大谷は『愛の業』を「最高度のキリスト教倫理」と捉える。

それは、『18の建徳的講話』では、倫理的なものとの接触と考察と実現が、人間の内部における永遠なるものについての意識から始められるという<ソクラテス的—内発的出発点>から始まっているのに対し、この愛の業では、「超越的な力から始められるという<超越的な出発点>から始まっている」ということである。¹⁸神は、人間に対し無条件に道徳的な至上命令「汝愛すべし」という命令を下す、権能を伴った外部からの超越的な力であり、単独者は神から呼びかけられ、神との人格的關係に入れられており、質的に新たな段階へと高められている。それに対し、『様々の精神における講話』ではただ一つのこと、つまり自己自身に向けられる関心が、『愛の業』においては、人間における自己否定の内面的な戦いがどんなにあろうと、根本的な関心は、「神と隣人」に向けられる、と見ている。¹⁹その意味で、『愛の業』全体の主題は、「愛の行為」についてのキリスト者の倫理的理想をその頂点に至るまで導いていくこと²⁰であると見なす。

このようにして大谷は、『愛の業』の内容について、第一篇は「愛の行為」の本質についての叙述を、第二編は実際に行われるべき「キリスト者の愛の行為」の具体的叙述をしていると理解する。²¹第一篇は、愛の隠された生命は最内奥のところにあって測り知れないものであり、また全生存との測り難いかかわりのうちにあることを示す。そして神の求める隣人愛は自己否定である。「愛の本源である神、その愛の啓示としての救い主にして贖い主なるイエス・キリスト」²²の自己否定の愛への信仰による愛である。それは自己愛や偏愛を駆逐する愛であり、愛することは義務である。なぜなら、愛することが義務であるときだけ、愛は幸いなる独立性の中に永遠に自由とされている。このような愛は、神を中間規定とする愛であり、そのみが真の隣人愛を可能にしている。²³

こうして第一篇で隣人愛の本質を語った後、第二編では、それによってなされる愛の業を具体的に語っている。第二編は聖書の「コリント人への第一の手紙」第13章5, 7, 8節における「愛は人の徳を建てて。愛はすべてを信じ、しかも欺かれない。愛はすべてを望み、しかも決して滅びない。愛は自分の利益を求めない。」という聖句、またペテロの第一の手紙4章8節、「愛は多くの罪を掩う」などを主題に語られるが、それは他者に愛を前提し続けることであり、罪があってもそれを見ない、徹底的な自己放棄でもある。

その特徴をよく表すのは、「死者を思い起こす愛の業」である。なぜなら死者を思うことは、全く返礼のない非利己的なものであり、強制のない自由な愛であり、死において隣人の関係は完全に平等であるからである。²⁴

大谷はヤンセンの言葉を引いて、この『愛の業』が、根本的に「愛は義務であるということ、

この義務はわれわれが接触するあらゆる人々に対するわれわれの關係に妥当するということ、つまり、隣人とは無條件的にあらゆる人々であるということ、しかし我々は神に対する愛によってはじめて隣人への愛を実現できるということ」であると語る。²⁵そこから、「われわれの隣人を見出すのは、神を愛することを通じてである。神は愛の必然的媒体である。」と結論づける。

すなわち、大谷にとって、『愛の業』は、キェルケゴールの「愛の倫理学」として、キリスト者が生きるべき愛の模範であり、理想を描くものである。しかし、彼の分類によれば、1848年の決定的な転機の前であり、そのことで「桁外れに高いキリスト者の標準」を示すに至る、中間的存在であると言える。しかし、このような隣人愛の思想が、単にキリスト者個人の内面性の問題ではなく、広く社会性としての問題にかかわっていることについて、大谷は、それ以上は考察を深めていない。また、「愛の倫理学」として見るなら、カント的な永遠の努力が地上で実現しないことに対して、キェルケゴールの示そうとしたそれ以上の神との關係が明らかにされていない。

大谷の業績は、何より、キェルケゴールの著作活動について、彼の人生の背景と著作活動の關係性、さらに仮名著作と宗教著作との弁証法的關係性についての歴史の見解を徹底的に整理、分析したことであるが、『愛の業』自体の持つ可能性や、『愛の業』と後期著作との關係性についての分析については、愛の内実に対する理解と共に、わずかに不満の残るところである。

(3) 尾崎和彦における『愛の業』

キェルケゴールの宗教思想の中でも、この愛に注目した「恩寵のキリスト教」の重要性をいち早く指摘したのは、我が国では尾崎和彦である。尾崎は、1970年代からすでにキェルケゴールの日誌における「恩寵」の概念に注目していた。²⁶そして、そのことが、キェルケゴールのキリスト教の二重性、弁証法的性格を明確にすることとなったのである。

まず、1847年の極めて早い時期に書かれたと思われるある日誌記述においてキェルケゴール自身は、『愛の業』の基本的モチーフを述べている。

「ゆっくりと前進しつつ、しょっちゅう、私にはこれ以上のことは分からない、隣のもののことなど知らないといった格好をしてみせるという私の産婆術的慎重さについては人々はみな何も彼も承知しているくせに—今度もおそらくは私の新しい建徳的談話が出るのをきっかけとして、私が隣のものを知らない、社会性のことなど何も知らない、とわめき出すだろう。馬鹿者どもが！もっとも、他面では私自身も、それが意味では真実であることを神の前に告白する義務がある。単に人々が理解している意味においてではない。—つまり、あくまでも私が本当にはっきりと鋭く一面を引き出した時始めて、他の面もそれだけ強く主張されているのだという意味においてである。

いよいよ私は次なる書の私のテーマを掌中にしたことになる。それはこのように命名される、

愛の業。」²⁷

ここで尾崎が指摘するのは、『愛の業』のモチーフが基本的に「社会性」(socialitet)の問題であること、しかも、この問題が、『種々の精神での建徳的談話』(注 創元社版著作全集での表記)を含む『愛の業』以前の著作が人々に与える、キェルケゴールは「隣のもの」(det Næste)に関して無知であるという愚かな判断への彼の講義として、彼の独時の方法論的カテゴリーを用いれば「矯正剤」(Correctiv)として提出されていることの十分留意する必要がある、ということである。²⁸この「矯正剤」の理念は、1849年の日誌において示されている。

「既成のものに対する、“矯正剤”と見なされる私の活動。

“矯正剤”というのは、こーそこ、右ー左というような反省規定である。

さて、“矯正剤”を提供すべき者は既成のもの弱い面を厳密かつ徹底的に研究し—その逆を面的に、効果的な仕方—面的に提示しなければならない。この点にまさしく“矯正剤”の本分があり、そこにまたそれを行う者の諦めもある。“矯正剤”はだからある意味では既成のものを利用するのである…」。²⁹

キェルケゴールにおける「既成のもの」を、大谷長は「ヘーゲル哲学」「キリスト教界」「ルター主義」とみなし、その「既成のもの」に対する矯正剤として、「主体性・内面性」「単独者」の理念及び、「殉教」と「倣い」のキリスト教である、と主張する。この見解は、やはり宗教性の「矯正剤」としての役割を重視することから、どうしても『キリスト教の修練』に代表される、「峻厳のキリスト教」的側面を重視する立場である。しかし尾崎は、この「峻厳のキリスト教」の立場が、単独者としての孤独というより孤立に結びつきやすくなることから、むしろ、キェルケゴールの「単独者」概念に対する「矯正剤」としての「社会性」の理念が弁証法的に規定されている、とも語る。³⁰すなわち、従来、キェルケゴールといえば「単独者」の強調の面のみ強調されていたのに対し、「単独者」にまつわる独善、孤立、他者に対する冷淡、そうしたものもまた、自己中心、自己義認につながる側面を持つゆえに、人の世で生きる者である限り、それに対する弁証法的なものの必要があることを看破したのである。

そして尾崎は、何よりもこの「社会性」が、世俗社会とは異なり、『単独者』のカテゴリーの否定的媒介を通して受け取りなおされた共同体、まさしく『隣人愛』の上に構築された共同体であることが看過されてはならない、としている。³¹それゆえ尾崎は、『愛の業』をいかに解釈するかについて、「既成のもの」と「矯正剤」との弁証法的関係を、「単独者」に方向定位された『種々の精神での建徳的談話』を含むそれ以前の諸著作と『愛の業』との間に、つまり「単独者」と「隣人愛」との間に見出し、妥当させられるかどうかにかかっている、と指摘する。

ここで注目すべきは、大半のキェルケゴール研究者(ここではガイスマー、ホーレンベアーなど)が、『愛の業』を単独者の自己実現の方向において理解しようとしているのに対し、スレークが「人間はすでに根元的に愛の使命を帯びている。欲望に始まり、自己愛・偏愛を経て隣人愛

に至る系列は包摂的な性格を有する。…自己愛は他者への愛において、他者への愛は隣人愛において、始めて充足されるのである」としていることである。つまり、愛は他者との共同性を使命とし、自己を愛する愛は、隣人愛において完成される。つまり、愛の相互性や共同性が、単独者にとって「矯正剤」としての意味を持つゆえに、愛なしには真のキリスト教とは言い難いのである。尾崎の業績は、従来言われてきたキェルケゴールの「単独者」概念が、実は愛の共同性によって支えられていることを再認識させたことである。『愛の業』の倫理的意味のみならず、こうしたキェルケゴールの本質的な弁証法的性格を愛において発見したことの意義は大きい。

(4) 須藤孝也におけるキェルケゴールの『愛の業』理解

須藤孝也は、キェルケゴールのキリスト教及び当時のキリスト教界に対する研究において、これまでの研究を踏まえつつ、独自の視点を示している。

須藤はまず、神との「共知 Samvid」という珍しい概念を取り上げる。

「あなたが、ほかならぬあなたが真理を知ったのだということを、あなたと共に知っている人が一人、神の家にはおられるのです。この共知に注目しなさい」³²

これは、神を信じるという行為が、人間から神への一方的なものと解釈されがちであったことに対して、神の側から知られていること、つまり人間と神との慕わしい関係性と見ることができる。同様の概念として、神との「親縁 Slæt」という語も指摘される。

「各人は本質的にはただ神および自分自身とのみ語るべきである——一人の人間だけが目標に達するのだから。人間は神性と親縁である。あるいは、人間であるということは、神性と親縁であるということである」³³

この「親縁」ということは、神との本質的類似性といった意味にとることはできない。人と神には絶対的な質的差異がある。この関係を、須藤は「神と共に在る単独者、神との関係を引き受けるエージェント」³⁴と表現している。神に対して立つというよりも、「共に在る」という側面、そしてそのような生き方を引き受けるという面を強調するのである。この「神が共にいます」という視点は、「神に向かう」「神に従う」という、これまでの単独者の視点とは異なる、それに加えて、「神とともに」という関係性がなければ、神の求める隣人愛、自己を放棄する愛は不可能であるから。それゆえ須藤は、単独者としての自己が、自己として生きる本質的なところに、他者との関係性があることを指摘する。

「キェルケゴールの単独者は、自己に関係するのにすでに他者の存在を不可欠としている。特に著作、『愛の業』においてこの点が確認された。48年以降のキェルケゴールは、この思想をもって、『キリスト教界』に対して積極的に関わってゆく。」³⁵

そして神を信じキリストに関わる者が行う愛の業もまた、キリストの愛の業に似るはずである。そして神を愛することと、他者を愛することはつながっている。つまり、キェルケゴールの言う

「人間を愛することは神を愛することであり、また神を愛することは人間を愛すること」³⁶という、愛における二重性がここに見出される。

「神をすべてのものにもまして愛することによってのみ、他者において隣人を愛し得る。他者とは隣人であり、隣人とは全ての他者という意味での他者である。」³⁷

このように須藤は、キルケゴールのキリスト教を、隣人愛における、神への関わりと隣人への関わりとの二重性において見ている。それゆえ、他者への愛による奉仕は同時に神に仕えることであり、言わば、神との関係は他者への関係につながることを望まれているということになる。このことを須藤は、「キリスト者は、神を介して他者に対し倫理的に振る舞うのであって、三段階論に関する安易な理解が示してきたように、宗教的実存に至る際に倫理が廃棄されるわけではない。」と語る。³⁸それゆえに、キリスト者であるということは、「隣人愛」の義務を果たすことであり、あえて厳しい神を中間規定とする愛による関係を求め続けることになる。

須藤の考察は、これまで見逃されてきた、単独者の実存構造そのものの二重性、神に関わることと隣人に関わることの二重性が、この愛の倫理において、神への愛と隣人愛の二重性において経験され、また自覚されることを示している点で、従来のキルケゴールの実存論における単独者の概念を変革するものである。これは、キルケゴールのテキストのデンマーク語からの読解、過去の研究史の成果を踏まえた洞察、何より、旧来の実存主義的なキルケゴール像に囚われない視点によるもので、高く評価したい。

結語

以上見てきたように、日本におけるキルケゴール研究の中で、『愛の業』の理解は、1960年代までは実存論的解釈に基づくものであり、キルケゴールの示した愛の独自性が彼の宗教性の中でも弁証法的性格において解釈されてきた。それに対し大谷愛人は、デンマーク語テキストと彼の生涯及びその後の研究史を広く踏まえた上で、新たな「愛の倫理」を示すものと理解した。しかしそれには、キルケゴールの生涯における転換の事実を、彼の著作活動の中にどう関わらせるかの問題が残った。これに対し、キルケゴールの生涯とテキストを重視しつつも、愛と恩寵の立場から、キルケゴールの愛の概念の複層性を解読したのが尾崎和彦である。そうした研究の上に、今日、キルケゴールの単独者の概念自体が、「神と共に」ある実存を含んでいることを解明したのが須藤である。つまり、単純なキリスト教の擁護ではなく、彼の思想全体に関わる問題を含んでいることが明らかにされてきた。これが日本におけるキルケゴール理解の現状である。

しかし、実はそれでも問題は残っている。キリスト者であることが、「汝愛すべし」の義務、キリスト者にとっての義務であるとされるなら、それが現実に実行不可能であるなら、どうするべきなのか。そのことは『愛の業』の中では直接的には語られていない。そして須藤は、『愛の

業』で取り上げられた愛の倫理が、義務と恩寵の関係として、後期宗教著作につながることを指摘しているが、「恩寵」についてほとんど触れていないことも同時に触れている³⁹。それは、当時のデンマーク国教会の事情によると須藤は考えているが、もう一つ顧みるべきは、大谷の指摘した、1848年4月の決定的転機との関連であろう。つまり、ルター派の教義としての恩寵の重視という客観的な問題でなく、彼自身が神の恩寵を体験し、そのことから、真摯に神を愛するキリスト者一人一人に起こる事実としての「恩寵」がどのようにその主体に変革をもたらすか、についてのキェルケゴールの考察である。このことは、実際に『愛の業』の内容と構造について、さらに詳細に検討していくこととしたい。

注

- 1、橋本淳による日本のキェルケゴール研究史では、キェルケゴールの理解は和辻哲郎、三木清といった、よりよい人生のための教えとして、実存的思考に向かうもの、またバルト神学への傾倒から、キェルケゴールを弁証法神学の祖として扱う見方が強かった。そこで評価されたのは、主に『キリスト教の修練』における批判的・闘争的なキリスト教である点を指摘している。橋本淳「日本におけるキェルケゴール—全体の展望と課題—」（『日本の神学』、1988年、第27号9—24頁）参照。

引用・参考文献

-
- 1 キェルケゴール、芳賀檀訳、『愛について』新潮社、1963年、232頁参照。
 - 2 キェルケゴール著作集第15巻『愛のわざ』、白水社、1964年、330頁。
 - 3 同上、330頁。
 - 4 同上、331頁。
 - 5 同上、331頁。
 - 6 同上、332頁。
 - 7 同上、333頁。
 - 8 大谷愛人『キェルケゴール著作活動の研究後編』勁草書房、1991年、1258頁参照。
 - 9 同上、1259頁。
 - 10 同上、1261頁。
 - 11 同上、1264頁。
 - 12 同上、1270頁。
 - 13 同上、1271頁。
 - 14 同上、1279頁。
 - 15 同上、1281頁。
 - 16 同上、1283頁。
 - 17 同上、1287頁。
 - 18 同上、1406頁。
 - 19 同上、1406—7頁。
 - 20 同上、1408頁。
 - 21 同上、1408頁。

-
- ²² 同上、1408 頁。
- ²³ 同上、1410-11 頁。
- ²⁴ 同上、1416-7 頁。
- ²⁵ 同上、1418 頁。
- ²⁶ 尾崎和彦『『単独者』における『孤独』と『愛』—或るキェルケゴール解釈の試み』『理想』第 555 号、1979 年 77-96 頁。
- ²⁷ *Søren Kierkegaards, Papier*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torosting, 2udg. af Niels Thulstrup, Bd. 1-16. (København, Gyldendal, 1968 -78),) (以下 P. と略す。) VIII¹A4
- ²⁸ 尾崎和彦『『愛の業』のモチーフ—社会性ということ』『キェルケゴールイアナ』第 6 号、1991 年 (キェルケゴール著作全集 10 巻別冊) 3 頁。
- ²⁹ P. X¹A640
- ³⁰ 尾崎、前掲論文、6 頁。
- ³¹ 同上、6 頁。
- ³² *Søren Kierkegaards Samlede Vøcker*, udg. af A. B. Drachmann, J. H. Heiberg og H. O. Lange, Bd. 1-20, (København, Gyldendal, 1968-78), Bd. 13. -164. (以下 SV13-164 のように表記)
- ³³ SV, 18. -152.
- ³⁴ 須藤孝也『キェルケゴールと「キリスト教界」』創文社、2014 年、157 頁。
- ³⁵ 同上、165-6 頁。
- ³⁶ SV, 12. -365.
- ³⁷ SV, 12. -62.
- ³⁸ 同上、168 頁。
- ³⁹ 同上、296 頁。